

座談会

「考えるための日本語実践」をめぐる議論

市嶋典子・早稲田大学大学院日本語教育研究科言語文化教育研究室(編)

1. はじめに

今回、『考えるための日本語——実践編』の執筆者、牛窪隆太さん、武一美さん、津村奈央さんと明石書店の編集者、西村優子さん、「考えるための日本語実践」にボランティアと参加してくださった文章談話研究室、博士後期課程の寅丸真澄さん、信森あずささんをお願いして、「考えるための日本語実践とは何か」というテーマで、座談会を企画した。

本稿では、この座談会で展開された議論の内容を報告する。

2. 議論

【考えるための日本語実践（総合活動型日本語教育）の考え方】

市嶋：どうでしょう、あらかじめ、論点を決めるとか、そういうのではなく、好きなように好きなことを話すような感じで。

寅丸：あ、すみません、質問なんですけど、考えるための日本語実践編ということで、実践報告ということで拝見したんですけど、その背景となっている、総合活動型日本語教育について2点ほど確認させていただきたいのですが、よろしいでしょうか。ちょっとわからないところがありまして、総合活動型日本語教育が対象とする学習者とは誰なのか、つまり、日本語学習者全てに対してこういったことが提案できるのかという問題と、それから総合活動型日本語教育っていうのが日本語教育においてどのような位置にあるべきなのかというお考えを、つまり他のいろ

いろなテキストを使った授業とかがいっぱいあると思うんですけど、そういうものとの兼ね合いと言いますか、関係性をどのように捉えていらっしゃるのかな、ということがちょっとわからなかったので、教えていただきたいと思うのですが、

牛窪：まず、総合活動型日本語教育の対象者というお話なんですが、特にこういう学生というわけではなくて、活動の方法というより考え方や私自身は思っています、そうすると、方法ではないので、形があってそれに合うような学生というよりは、むしろ学生とその現場に合わせていろいろ形を変えてできるものではないかなと思っています。ただ、じゃ、初級、0初級でできるのかと言われるとやったことではないので、何とも言えないのですが、今、武さんが実践されているので、またお話など聞きつつ・・・あと、もう一つは位置ですね。以前、修士課程に在籍していたときは、もう、これが全てだ、教科書はあり得ないと思っていたのですが、ま、そんな事を言っていると生きていけない。今は、一つの方法ではなくて、いろいろなやり方があると思うので、いろいろある中の一つの考え方だと思います。ただ、その教科書と総合と対照的に考えるのはちょっと違うかなという気もしています、総合っていうのは考え方だとしますと、教科書を使うパターンクラスでも、考え方、理念的なものは何かっていうと、そこでもまた違うはずで、そうすると、もちろん総合の中に教科書的なもの、テキストっていう形じゃなくても、何かそういう要素的なものがあるというのもありかな、と最近はあるようになってきました。

武：私も、ちょっとそう思ってます。

津村：ここに書かれていることはかなり、何でしょう、目に見える、できるだけ分かりやすくするために、目に見える形で書いてあるので、固定されたものっていう風に捉えられがちだと思うんですね。だけど、執筆者としてはそういうのは、本当は避けたくて、目指す方向性みたいなものを本当は伝えたい。で、その目指す方向性も人それぞれでいいと思うんですね。方向性に合う形をさっき、牛窪さんが言っていたみたいに伝えていけばいいと私も思うので、いろんなやり方があると思います。だから、教科書を使うからダメとか、教科書を使わないからダメとかそういうのではなくて、何をどういう風に使うか、どういう目的でどういう風に使うかのかつ、てことさえ自分の中で、ちゃんと腑に落ちていけば、そこは何でもありかな、って逆に私は思ってます。

武：最初に学習者なんですけど、別にどういう学習者っていうのは私にはないんですよ。で、位置づけに関しても、総合をやるときには一応学生にわかりやすいよ

うに、テキストはありませんって、それは説明してるんですけど、それは一つの説明の仕方、テキストがないのが総合的とは考えていなくて。テキストがあるのもありだろうな、というか、実際に私いま、テキストがあるクラスを持っているんですけど、そこでも基本的な考え方は同じなんです。そのテキストは、学生が何か表現したいことのためにあるっていう風に考えていて。先に学生の表現を走らせながら、足りないところを差し込んでいって。テキストをやっても足りないものを差し込んでいきますよね。それと同じで、作文活動、表現活動しながらテキストもあって、足りなければ差し込んでいき、テキストにあるものはどんどん使おうって形で学生に呼びかけていて、ほとんど同じなんです、考え方としては。

寅丸：そうすると、何でしょうね。この、こちらを拝見したりとか、あるいはいくつかのものを読んだりするとかなり極端な例が出ているんですよ。

武：たぶん私たちもここにいないんですね。(笑)あの、これはほんとに書く間に時間がたっていて、すごくオーソドックスで、なんていったらいいんでしょう、私自身は、今ここには私はもういないんです。

牛窪：一つのパターンって言うか。

武：とにかくやっているものを全部見せてみよう。いつも本当にわかんない、わかんないといわれるから、じゃあ、見せてみようか、っていうことで、見せた。で、これを行っている間に自分の中でも整理できたものがいっぱいあったんですね。これを書いている、苦しみながら書いている間に、で、それでこう書いたあと、ここからは離れて、何となく今は違うところにいる、っていう感じなので。

寅丸：でもこれを拝見していると、あと、いろいろお話とか聞いたりすると、それこそ学生用のガイダンスのお話とか聞いたりすると、かなり教科書を使っちゃいけないとか、いけないっていうか、教科書は使いませんか、あと誤用訂正なんかもしませんかというふうな、そういう話を聞いたりとかするので、かなり極端な例だったのかなという風に。今ちょっと認識が違ってたんだと思い直したんですけど、そうするとやっぱり何だろう、普通の正規テキストを使うものとか、いろんな、その教え方っていうのがあって、その連続体っていうか、一部になったりとか、あるいはその総合があって、その一部に教科書が使われていたりっていう、そういうふうな、もっと密接な、全然違うものではなくて、もつとこう、密接な関係にあるっていう風に考えて大丈夫なんでしょうか。考え方自体が違うっていう、

牛窪：どうなんですかね。

武：密接、関係とか教科書を使うときの考え方が違ってくる。

寅丸：あ、もともとの考え方。

武：考え方の違いだけで、そうすると選ぶ教科書も違いますよね。

寅丸：あ、なるほど。

牛窪：おそらく教科書を使うとか使わないとか、誤用訂正の問題は、対学生的に非常にわかりやすく、こう、紋切で言っている部分もあるので、するかしないかっというの、実はそんなに問題ではない。ただ、直すために話させるといったらちよっと違うと思うんですけど。ほんとに考えていることを相手にわかりやすく言うために、まあ、その点で考えれば、絶対直しちゃダメとか、直さなきゃダメとかそういうのともまたちよっと違う、という気はします。

信森：あの、最初の、質問に戻るんですけど、対象者の話なんですけど、早稲田の実践研究の報告に予備教育の学生には合わないという結論を出していたものがあつたと思うんですけど、そういうものは違いますが、どうでしょうか。自分の勤めている日本語学校で、活動型をやってみただけでも、どうもその学生には受けられないようだっていう結論を出した論文を見たような気がするんですけど、違いますか。別のやつでしょうかね・・・えっと、実際に一年でほぼ0の人を1級に合格させるのが日本語学校の仕事ですけど、時間的な制約っていうのが非常にあって、あと、能力試験に対応する力を彼らは求めていると思う。そういう場合に、その、自分の考えを述べていくっていうような・・・

武：試験対策は別の話になると思う。

信森：っていうことは、対象は試験対策の学生でないということ、日本語能力試験対策の学生ではないということ・・・

牛窪：対象というのは？

武：対象というのは日本語能力試験とか、試験？

信森：はい。

牛窪：その、例えばその枠の中でも総合的なことはできるっていう考え方です。その総合というものがあって、じゃ、これはどこにあるのかという話ではなくて、例えば、語彙、覚えなきゃいけない語彙というものがあつたよね。2級だったら2級で、じゃ、それを200個使って自分の言いたいことを書くとか、そういうものでもそれはリンクしているといえればリンクしている一つの形ではあると思うんですけど。なので、これがこうむいているという考え方は、僕はしないんですけど。どうでしょうか。

武：試験対策、ちょっと難しいですね。試験対策、この考え方でできる・・・。
試験対策って、でも作業みたいな感じですよ。

信森：暗記ですよ。

武：暗記、だから、やっぱり相容れないかもしれない。試験対策する前に日本語を勉強しますよね。何らかのものを、対策する前に、ただこれだけでは勉強できませんよね。その意味ではその試験対策の前の基本的な任務は十分できると思うんですよ。

信森：ま、レポートを書くことが総合ってわけじゃないということですよ。

【学習者ニーズと効率性】

寅丸：ただ、今試験対策の問題ができましたけど、学習者ニーズっていうか、学習者が例えば試験に合格したいとか、あるいは何だろう、すごくきっちりきっちりしたものを、日本語勉強したいっていう非常に几帳面な学習者がいたとして、研究者になりたいとかそういうような学習者がいた場合にも、その学習者のニーズに答えられるのかっていう問題ですね。今お聞きしたのは非常にフレキシブルなものだったお聞きしたので、できるのかもしれないな、って気にはなっているんですけど、そういう問題とか。あと、経済性というか効率性というか、あの、一定期間内に仕上げなければいけないっていうか、大学なんかの場合には割と結構自由だったりとかしますよね、そういう部分。もう学習者まかせで、割と切羽詰まってない学習者が自分で科目を選べる状況だから良いんですけども、たとえば日本語学校なんかで、この期間内でこれだけのことを済ませなければいけない、なんていうようなことがあった場合に、果たしてどういう風にその総合の考え方っていうのが、あの、適応できるのかなって思ったんですけど。それはやはり授業の一部の中で使うことができる、というお考えなのでしょうか。

牛窪：うーん、そうですね、例えば、今、タイで教えているんですけど、そこは本当は早稲田が作ったんですが、日本語学校なんですよ。学生もちろん、何ていうんですか、それを生活の全てにして、もう、一日 4 時間勉強する、大学を卒業してから、次の就職までっていう。そういう中で、もちろん学生も効率性を求めますし、早く正しいものを、っていう感じではあるんですね。そういう意味でニーズっていうものを表面的に拾うと、正しいものを効率的にどんどん入れていく。で、それを学生もまた出せるようにすることになるかと思うんですが。作文をそこで先々学期かな、担当した時にこういう感じのことをやったんです。その授業では

そういう、正しいかどうかではなくて、読んだ人がわかるかどうかっていうことと、あとその作文の内容がはっきりわかるものか、直すのは後で考えればいいっていう風にやったんですが、そうすると、もちろん、きっちりかっちりの学生もいて、それはもう、クレームとして何やってるかわかんないとか、いろいろ言われながらも、で、その授業の中でその学生と、じゃ何でこんなことをしているのかという自分の考えを説明して、じゃ、どういう授業をやってほしいのか、じゃ、どうすればいいのか、ってことを話し合っていく、っていうのも一つのニーズ、向こうのニーズも、もちろんかっちりと意識的な、意識化されて私はこういうものが全部あって、よってこういうニーズがあるんです、では決してなくて、何となく自分がこれがいいと思っているというものであったりもするので、結局、3か月やって、最後はまあ、こういう部分ではこれはよかった、でも、もっと表現を知りたかった、って言う授業後のそのアンケートで書いて、去ってった人もいますし、今、日本に留学していて、つい先日会ったんですけど、あの授業は大学に入って、今すごく良いと思っっている。でもあの時は嫌だったっていう学生もいて、そういう意味では、ここからここまでの間に学生が楽しい思えるということにはそんなに意味はないという気もするんですね。その時はわからなかったけど、でも、長い目で見たらというのもあるような気がして、そういう意味では、説明がニーズに答えるっていうものではないですね。そもそもニーズというのはそういう感じのものでもないかなと思っています。あとは何でしたっけ、効率性はないですね、だからそういう意味では、効率性が果たして本当に効率的かというの。

津村：なんかきっちりやっても、日本語ができるようになる、必ずそういう訳ではないですよ。なんか、あの、こういう自分にとって大切なテーマとかについて話していくと、最初はなんかこう、一言一言、全部ことばを探して、組み立てて自分でわかりやすいものに、みんな話しながらわかりやすいものにしていって、何回も何回も説明を繰り返しているうちにそのものに関しては、一般に言われるそのレベルの語彙ではないというものを駆使しながら、自分の考えを伝えているので、何か効率性っていうのは何かなのというのは、何が効率的かは、あまり分からないなあっていうのが今の私の気持ち、迷いというか・・・

武：なんか、試験に受かることを目的とするのであれば、これをやって試験には受からないかもしれないので、何ともそれにはお答えができませんけれど。でも、日本語を使いたい、使うために日本語を勉強するっていうのであれば、絶対に有効で、むしろ効率的だと思うんですね、というのは自分が使う試験のために、自

分が絶対使わないような語彙を覚え、いらぬような漢字を覚え、っていうのは効率的かって言ったら、すごく非効率的ですよ。で、今、1レベルの学生のクラスでやっていて、大学院の人が二人なんです。で、やっぱり自分が言いたいことだけをやっていくので、2週間しかまだやってないけど、結構、すごくいろんなことが言えちゃって、例えば、「何々こと」みたいな名詞節みたいなものも、もう、言えちゃうし、「と思います」みたいなものももうそろそろできるかなって、そんな風に、何ですかね、こう積み上げていくほうがむしろ、日本語を使う、使うための日本語という意味では、すごくいらぬものを覚えていて、私は無駄が多いような気がしています。ただ、試験となると、能力試験1級の漢字、語彙が何字というのがあるので、それを考えれば、それを効率的と考えればこっちのほうが非効率的だし、だから、何か、目的によるんですかね。試験が目的だったらちょっと意味が違うかもしれないとか、何かうまく言えないですけれどね。

寅丸：どうなんでしょうか。そうすると試験っていう、ちょっと特殊な例かもしれないですけど、それは、まあ、置いといて。この総合型の考える日本語とかそういうものをやった場合に、長期的かもしれないけれど、自分が必要な日本語を実生活で使うことができるようになる。そういうようなところを目指していると考えてよろしいでしょうか。

武：その人が目指しているところ。

【思想としての考えるための日本語実践（総合活動型日本語教育）】

西山：なんていうんですが、これ実践編っていう今、タイトル、仮なんですけど、つけてますけど、私の感覚では、あの、ハウツー本という感じでは全くなくて、その、総合型をするとかしないとかじゃなくて、そういう思想を持ってるか持っていないかということだと思うんですけど。で、そういうことを、考えを理解していれば、学期の一部でこれをするというのじゃなくって、随所随所にこれを、考えを浸透して、授業に反映されていくんじゃないかなと思うんですね。なので、実践編ですけど、これはあくまでこう、実践したサンプルであって、いってみれば本当に思想だと思うんですね。だから私が受けてるイメージでは、何ていうんですかね、これをやらなければいけないとか、ほんとに今さっき言った、武さんとかもおっしゃったように、方向性はいっぱいある、っていうそこがちがう。だから、そこで効率性求める人はたぶんこれはもう頭から、もう、ないっていうか、関心がないだろうし、日本語学校でも短い期間の中にいろんな事やんなきゃいけないけど、これもや

りたいとかいう人はどうすればいいだろうっていう風に考えるのだろうし。だから、何か私はアイデアっていうか思想ですね、これは。という風に読み取ったんですけど。

武：ありがとうございます。

牛窪：実践編は実践しろというわけではないですよ（笑）。実践してみました。

寅丸：ああ、なんかこう出ちゃうと、議論の場合だとなんかあやふやな状況で、なんかこう観念的なものだけ理解するっていうか、逆にあやふやなだけに、いろいろと自分が想像して、考えられるんですけど、実際に出てしまうと、あ、こういうものなんだっていうふうに思わず見てしまって。で、シラバスとかが出ちゃうと、余計、本当にこういうふうにすればいいのかしら、みたいな形になっちゃって、なので、縛られちゃったっていうのがあると思うんですね。ですから、今お話伺っていて、そういう考え方なんだって、あくまでもこれ、実践例、実践報告ととれば、また自分の授業にいかしたりってこともできるのかなって感じも確かにしました。

信森：なんか、あくまでも、総合活動型日本語教育であって、教育論っていう風に考えたほうがいいのかなって思うんですね。総合活動型で終わってるんじゃないかと、そのあとに日本語教育があるので、何かもっと概念的なものという感じがします。で、概念的なもので私が疑問に思っていたことなんですけど、形があるものじゃなくて、その場で変えていけばいいという風なものなんだということだったんですが、実際に行われている形態として、その意見を書かせて、動機文を書かせて、結論を書かせると、こういう形でちょっと書くのが好きじゃないっていうような非常に抵抗を示す学習者がいた場合に、どうしてそこで学習者たちと一緒に、対話をなさらないのかなっていうのが私の疑問で、でもこういう形ですから、これでやってみましょうみたいに、最後まで進んでいったんですね。そこでこの形を一回壊してしまおうっていうようなものも含めて考えていらっしゃるのかなあっていう、でもやっぱりこの木曜日の時に、自分の理念を曲げられないっていうような発言をされた方がいらして、ああ、そう、これは曲げられないものなのかっていうのが非常に私には強く印象に残ってしまったんですね。これを何とか理解してほしい、これを反対にできないんだったらやってみろっていうくらい力を持つてるのかなあという、それくらい強い信念を持ってやってらっしゃるのかなあっていうところが、どうなのかしら、と思ってるんですけど。

武：どうですか、それはそれぞれ担当者によって違う。

牛窪：それはばらばらなんで、変えちゃえばいいんじゃないかと思えますけどね。

信森: チームティーチングっていうか、機関っていうものもありますよね。学習者と教師だけじゃなくて日本語教育っていうのは、機関、雇用している機関っていうものがある、だからその、がらっと、じゃあ、もともとの目的を変えるっていうのは非常に難しいんじゃないかっていうふうに思うんですけど。

武: あ、その、総合活動型でやっているものをもとものかたち、それを変わるっていう。

牛窪: たとえば、こう、学生が出てきて、こんなのやりたくない、僕たちは映画が見たいんですっていう、その映画を見るとか、そういう話ですか？

信森: っていうか、その見るとはどうなのかってことについてみんなで対話をしてみる時間を持つ・・・

牛窪: それは、するべきだと、個人的には思いますけど。

武: どうでしょう。

津村: 結構、このクラスでは、こうするからこうするんです、っていうのだと、一緒に活動して行けないと思うんですね、教師と学生とボランティアが入ったりして、だから、どうしてこういう授業をしようとしているのかっていうのを、相手がどんな学生であれ、伝える場は持つべきだし、伝えたら、向こうからフィードバックなり何なり、感想でも何でもいいし、反対でもいいし、何かそういう機会は、あの、私個人としてはほしいですね。逆に、なんかそういう場がないと、すごくワンマンで、逆に不安な気がします。

牛窪: そういう意味でも方法じゃないんですよ。そこで学生に何でこんなことするんですかって聞かれて、いや、決まってるんだよって言った時点で、それはもう、方法になってるじゃないですか。そこで、その担当者がしっかり自分の中の理由があってこれをするのであれば、説明はできるはずだし、それはするべきもので、学生が言ってこないのであれば、自分でまた考えて、そこを調節するっていうのが、その教室の形かなって思うんですけど。

武: そういうことを話し合うことを含めて総合活動型だというふうに考えているので、問題はいろいろ起きるんですが、起きた時はそこでじっくり話し合っ。牛窪先生が言ったように私はなぜこの活動をやるのか、っていうのはすごく良いと思って、どうして良いと思うのかってことを一生懸命伝えるしかなくって、そうするとじゃあやってみるかというみたいな感じに結構なって、なんてことが今まであって。本当に怒ったり、泣いたり、そうした時には結構むしろ理解が進むっていう感触を持っているんですね。で、むしろ、すいすいすいって行っちゃったほうが心

配なんですね。形だけで行っちゃってるのかな、この人たちっ、と。すごく恐怖に陥る。で、反抗、反抗っていうかなんか、ええっ、て思うほうが当たり前だと思うんですね。今までやってってきたものと、違ふし、だからそういう反応が出たほうがむしろ話すきっかけになって、向こうが何も問題意識ないのに、こうでこうでこうでっ、と話しても耳からこう、入っていかないですよ。だから、本当に、何だろう、今、おっしゃったようなところで話し込んでいくっていうのも考え方、この総合的な考え方。

信森：実際に過去にじゃあ、もう対話やめましようっていうようになったケースはなかったですか。

武：対話が嫌だからやめましよう・・・

信森：ほかの何か方法を考えてみましょうっていう。

牛窪：どうでしょうね。

信森：なかったですか？今まで。っていうか、その対話以外にどういう可能性があるのかっていうことを知りたいと思って

牛窪：アンケートを取ってる人はいました。

武：アンケートみたいな取ってる人はいましたね。でも、対話をやったりやってなかったり、活動によっては、この前、他のクラスでやったのは、対話っていうよりクラス内ディスカッションで発表してくださいっていうのにして、ディスカッションして外に対話に行かせるってことはしなかった。その学生の様子を見て、何か、時間的に忙しいっていうのはあったし、で、いろいろな形を。最初自分が活動を担当した時には、これをやっばり、をやらなければいけないっていう思いはあったので、でもそうした時にうまくいかなくって、何か爆発があったのね。で、その時に話し込むっていうことで、解決してるうちに、あ、これも活動の一つなんだなって思えるようになったんです。何か私の中ではそうなんです。でも、それぞれ担当で違うから、私は救いようがなくって、総合はこうですって言い方はできない。

信森：じゃ、絶対パターンを変えずにやっているってわけではないっていう。一応その確認だけ。

武：でもたぶん、前期担当した人とかは、あの、やっばり何っていうんですか、どうしてもこの形をやらなきゃいけないって、結構、クラスを始めて任されたときは緊張が、なにかにせよありますよ。テキストタイプにしても今日中にこの課をやるかってあるんで、それは総合にかかわらず、それは新しいクラスを担当した時に誰しもあることだと思うので、総合だからこうだってことではないと思うんですね。

寅丸：なんかやっぱり、その担当者によって違うと思うんですけども、かなり強く、この、何ていうんだろう、この考え方でやりますみたいなそういうものを例えば聞いてしまったりすると。で、そうすると、今度は逆に自分が学習者だったらどうなのかな、ってことを考えてしまったんですね。自分は外国語の学習経験とかがあって、やっぱり強制されるのはお金を出して勉強しているので、非常に嫌な訳なんです。で、教師とあくまでも学生だけれども、知識はないけども、50/50の関係でいたいと思っていて。で、私に選ぶ権利がほしいんですね。学習者としては。なので、もしこういういろいろなものを提示されたとしても、なぜそういうものを提示されるのかとか、これがどういう、自分にとってためになるのかっていうのをやっぱり説得してほしい訳なんです。自分自身納得したいわけなんです。納得して気持ちよく勉強したいと思うんですね。なので、逆にそういうような手続きがまるでなく、これがいいですとか言って、ガンガン進められちゃうと、果たして学習者としてはどうなのかな、っていう疑問がわいたので、まあ、信森さんと同じような疑問を私も抱いていたんですけど、やっぱりそれは担当者によっても違うというような。ま、考え方。

武：ま、自分もこれがいいと思って信じているから、はたから見たら私もこう言いながらも、進めちゃってるのかもしれないし、なんかちょっと今不安になってきましたね（笑）。自分もいいと思ってるから学生に対する説明も、もしかしたら不足かもしれないし、今ちょっと不安になってきました。

寅丸：なんかきつと、何でしょう、普通のテキストを使ったスタイルが、例えば何とかスタイル、あの、そういうコミュニケーション、通常今までやってきたスタイルですと、安心感があるわけですね。受けているほうとしても。なんですけれども、新しい考え方、そんなに新しくなくて、もしかして非常に常識的なところから考えられた考え方かもしれないですけど、でも、なんか今までとは違うものを提示されたりとかっていうふうになると、非常にこう、大丈夫なんだろうかっていうか、学習者としては不安になるんじゃないかなっていう部分があるんですね。なので、自分がそういうふうにならな立場になって学習者になった場合に、どうやったら受け入れられるのかっていうか、どうやったら一番納得するのだろうかっていうこと考えながら、ちょっとこういうものも読ませていただいたんですが、ただ一つは私自身はそういうこと自体が好きなので、そういう活動であれば、やりたいことを書くとか、私について書くとかっていうそういうような活動内容だったので、そういう点では何だろう、あの、非常に合っているのかなあという感じがしたのですが。で

も、逆に、それこそテキストとかが大好きっていうような人にとると、またどうなのかという疑問ってのは、やっぱりありました。

武：学生は選んでくる、っていうのは大事ですよ。前に選ばないとにかくセットで取りなさいっていう時があって、この前の前に、やっぱりすごく大変だったんですね。取りたくないものを取らされて、しかもこんな訳のわからないものをもって、すごい大変だったんですね、本当に。しかも学生人数多くって、だから学生が納得して、で、自分で選んだってことが大事で、選んだ揚句に大変だった時の、学生さんもいて、でも自分が選んだから仕方がないって泣きながら書いて（笑）。

牛窪：でも、あの、選ぶ選ばないもありますけど、その教科書を使ってやるっていうのだから、その一つの思想なわけじゃないですか。裏にあるものは、で、学生も何でこんなものを使わなきゃいけないんだとか、じゃ、何ページ読んで、何でこんなもの読まなきゃいけないんですかとか、何でこんな漢字を私は覚えなきゃいけないのかか思いながらも、きっとそれでもやってきたものだからっていうところで、こう流しているっていう・・・

寅丸：それは目標がはっきり見えてますよね。最後まで、これだけのものが一応自分の頭にインプットされる予定なんだったものが教科書があるとはっきり目に見える形で提示されているわけで、それをされないで、あなたが自分でこう獲得していけば、って言われた場合はどこまでいけるんだろう。

西山：でもこれでも予定表みたいなものを学生に渡すんですよね。これが教科書代わりみたいな感じで、学生は受け取ってもらえないんですかね。配布資料で 1 週、2 週っていうふうに週で分かれていて、すごくなんかこう、明快というか普通の教科書にだって書いてないじゃないですか、ここまで最後までいったら、あなたはこうなりますよってことはないけども、なんか、私は何かこの活動の流れがあると、学生もなんかこう段階を踏んで、ここまで最終的には行けるというのがわかって良いなと思うんですけども。

寅丸：レポートが作れるっていう意味で、ですね。

牛窪：まあ、漢字 2000 語覚えたいっていう人は、家で覚えれば良いような気もするんですよね。必ずしも教科書があって、これを 1 冊使いますと言ったところで、それが確実にインプットされる保証はどこにもないじゃないですか。で、自分でやるしかないっていうのはあって、僕はその辺は何なんだろうってのは、最近、考えていることでもあるので、なんかこう、ただ流されてるだけな気もするんですよね。学校っていう枠の中で、ずっとそれでやってきて、これであれば安心、そん

なことは実は誰も保証はない、けれどもほかの人もこれでやってるし、これがあつたら、確かに自分もそう思うんですよね。先生が来て、じゃ、これを今日やりまస్తుっていうと、それに対して何でそれやるんですかっていうのは思っても言わないだけだろうなと思うんですよね。でも先生が来て、例えば、このクラスではこのことしますって、何か突拍子もないことっていうか、自分の経験と全く違うことと言われると、抵抗感みたいな。そういう、なんででしょう、そういうのは、何で自分はそうなんだろうっていうのは最近考えるんですよね。その価値観というのは、ちょっと考えてみると気持ち悪い気がして、それは確かに学生がいて、他の学生が文句を言わないやり方はなんとなくわかるじゃないですか、ビジネスの人だからとか、ちょっと名刺交換もやるだとかみみたいな。そうやったときに、何でこれをやるのかってところで、自分も受けてきた教育をそのまま下に流している気もして。

武：あまり考えずにとって・・・

牛窪：そう、ですね。

武：自分も学生も？

牛窪：いや、その、ニーズっていうのをすごく批判的に考えてまして、それにこう答えるっていうのも、もう思想なわけですよね。その答えることで、裏にある色々な物を実は自分は見えていないけども、答えることによって、こう、絡まっている思想があるじゃないですか、学生が正しい日本語を覚えたいであろう、じゃ、教えましょうといった時に、自分は見えていないけれど、その裏に実はあつて意識されない状態で、動いているものが、逆に衝突がないことで、そういうものが全く見えないうものがそのままずっと流れていくのかなあと。

信森：じゃあ、教えましょう、つたぶんここでは言えなくって、正しい日本語って何ですかって、

牛窪：そこで衝突があると、なんか理解もあるじゃないですか。

武：つまり、なんかニーズって言われていても、思わされているだけだけれども、それがあたかも自分のニーズと思込んでいる教師と学生がいて、それが、何だかわかんないけど、何かわからない自分が何かわからないものに踊らされて、何かやってくるってなという感じ。

牛窪：それで、実は本当は良いかなんてわからないまま、これはいいんですって言って終わりっていうのが怖い。と、最近思うんですよね。だから、そういう意味では学生の求めているものと違うってことはそんなに悪いことじゃないような気が・・・

武：そこが見えている、ってだけで一歩進んでいる、違うっていうのが見えている、で、暗黙にニーズがこうでこうですね、って言うてるけど、実はそこは話してないだけで、全然違うものだったり、お互いが本当は私がしたいことじゃなくて、でも、これがいいんだと思わされているだけかもしれないっていうこと。

牛窪：そうですね。

信森：でも、そのニーズを突き詰めていったら、どうですか。正しい日本語って何ですかとか。

牛窪：え、それは、あり、だと思っんですよね。

信森：それってニーズに答えることだと思っんですが。

武：そう思ったって、疑問のところに答えていくところがニーズに答えていくっていうこと。

信森：いや、彼の、その人が学びたいと思っっている、正しい日本語っていう、でもそれは基準が漠然とした、私にもわからない、じゃ、それはどういう意味で言ってるのかっていうことをずっと話していつてその人が本当に、今お金を払ってまでもやりたいことが何なのかっていうのを知ろうとする姿勢って必要じゃないかなと思っんですよね。

牛窪：それは必要ですよ。

信森：なので、あなたがやりたいことは関係ないからって言っってしまうのは非常になんか、抵抗があるんですけど。

牛窪：それは抵抗があります。あなた、誰ですかってことになっちゃいます。

武：思想の押し付け。つまり、気をつけなきゃ・・・

西山：学生ってそんなに明確に自分がやりたいことは、これっていうふうに持っっているもんなんですか。

津村：そういうことはないと思っますね。学生もむしろ先生と一緒に試行錯誤じゃないですけど、模索しながらやっっているっていう感じがすごくするんですけど。

西山：私も実は日本語教えてたんですよ。それはベトナムで教えていたんですけど、やっぱり、私からすれば授業やっってるんだから、授業を作るのは、半分は私で、半分は学生だと思っていたんですよ。だから、何がしたいのかは全然言わないので、アンケートを取ろうということになって、アンケートを作ったんですよ。で、学校、このクラスについてどう思っますかとか、いろいろ項目を作ったんですけど、誰も反抗する人がいなくて。いや、素晴らしい授業ですとか、先生はやさしいですとか、そんなことばっかり書くんですよ、それはベトナムの文化で先生は絶対っていうも

のがあって、先生に楯突くとかってのは、絶対考えない、そういう思想もないんですよ。それで、あ、なるほどな、と思って。で、そこで私の中で、学生も何が楽しいかはわかるけど、何をしたいのかってことは実はよくわかってないじゃないか、とすごく思っただから、何かある程度、こう、先生が中心で、あんまりふらつかないで、授業を進めるのはすごく大切じゃないかな、と思うんですね。生徒の顔色ばかり窺っているのも、あの、必要ですけど、それに振り回されると、本当に進む方向が失われてしまうんじゃないかなと。

【教師の役割】

信森:このクラスはみんなあんまりコミュニケーションしてくれないから、こう、全然自分のやりたいことも、言いたいことも言えなかった、あっちのクラスはすごい活発なんだよねみたいな、そういう差なんかは・・・

武:あるかな?

津村:あると思うんですけど、たぶん学期が始まってすぐは、いくら活発なクラスでも最初は何か様子見で、もう授業内容自体不安だし、お互い知らないのも不安だし、っていう感じですけども、そこからとにかく自分たちが言ったり書いたりしないと始まらない授業なので、言ったり書いたりしなきゃいけないっていうか、したいっていうのとか、あとは、お互い関わっていかないといつまでたっても学生個人と担当者でやって、他の人は傍観者っていうのは、自分たちもつまらないと思うし、なんかその辺をくみ取りながらうまくこう、活発に、活発まで行かなくても、もうちょっとお互いが関われるような雰囲気を少しずつ作っていくしかないかなあと思っていて、これはでも、教科書タイプでも同じですよ。ばらばらに座っている人たちをどうやって関わらせていくのか、っていうのはたぶん、どこでもクラスを形造っていくというか、まわしていく時には必要なことだと思うので。

寅丸:ただ、生の部分、難しいと思うんですね。で、例えば教師の役割みたいな話になっちゃうと思うんですけど。あの、学習者ってのは、非常にいろいろ。ばらばらですよ。特に自分の個が出てきちゃうと本当にばらばらになってしまうと思うんですけど、そういった場合で、例えば、意見とかを言わせた場合に意見レベルが違うっていうことがやっぱりありますよね。かたや、なんかこう、非常に深いことを言っただけなのに、かたや、どうでもいいような、言葉は悪いけど、ってことを言って満足しちゃうっていう人もいると思うんですね。でも、そういうものがあつた場合、でっこみひっこみがあつた場合に、で、学習者は大人だったり

すればそれなりに我慢したりとか、それなりにいろいろするんだとは思うんですけども、そこいらへんの、でっこみひっこみっていうのをやっぱり調整していく役割ってのが教師に期待されるのかなどうなのかなっていうふうに思って、で、こういう教室の場における、教師の役割っていうのは、どういうものなのかなあ、というのは、ちょっとわからなかったのですけれど。

牛窪：ぼくは調整しなければ議論というか、そうですね。そういう感じの、僕は、その、先ほどの責任とか突き詰めていくと、それは教師だと思っているので、突き詰めていくとですけど、それはもちろん議論が意味のある形になるようには、常に考えていないと、ただ本当に話して、ああでもこうでもないで終わってってしまう。で、そういうのにはならないように。でも、こう、あんまり入り込みすぎないように引きすぎないように、って感じで、そういう意味では先ほどおっしゃったように、生のコミュニケーションなので、疲れるんですよ、とても。

信森：私はこの活動半期しかやってないから、この活動でのいいレポートとか、なんか、あまりわからなくて、ただ自分が一緒に参加した時に、なんか苦労してちゃんと形になったものは、私の中では良いレポートで、苦労しないというか、なんか途中であきらめてしまったりとかいうのだとやっぱり最後まで納得いかない、学生も多分納得いかない形になっていると思うし、こちらとしてもそういうものになっているかなというのがあるので。

武：それって、何でしょう、いいレポートって何でしょう。何となく自分の中ではこういうのがいいレポートって、担当者の中にあって、それに向かって行ってるってのはあるような気がして、それどうなんだろうって。

牛窪：まあ、それはあつてしかるべきじゃないですか。

武：でも、ずっとやってるとそれは嫌な感じがするのはなぜでしょう。

津村：でも、例えばこの活動だと、こっちが良いと思う方向を、例えば、学生に提示したとしても、それが却下されることってあるじゃないですか。なんか、ことばを提案するにしてもこういう表現もあるけどっていったら、うーん、違う、パーンって投げられたりとか、することはあるので、こちらがたとえこういうふうに行くといいじゃないかしら、と思うものがあつたとしても、結局選ぶのは学生だから、そこは、そんなに、ものすごく引っ張って添削してこの部分をこうやって膨らませましようとはしてないですもんね。

信森：教師が言わなくても学生が、このパラグラフの上のほうがいい、とかそういうのは教室内で自然にだんだん出てくるようになってたりして、すごいなあ、て

感動した記憶がありますね。この段落はいらないんじゃないのかとか、結構シビアに行っちゃうので（笑）、先生に言われるよりはよっぽど身をもって思うんだろうなあ。

津村：でも入れるって人もいますもんね。

信森：全部言いたいことって。

津村：いらないことは書いてない。

【学習者主体】

信森：学習者主体というのをバーンと書いてあったんですけど、それは、どういう意味で使われている・・・

牛窪：学習者中心とは違いますということで、真ん中に学生を置いて好きなようにやるってのはもう、教育の放棄な気がして、そういう意味では全く違うものではないかなと思います。

寅丸：ただそれって言うのは、学習者が、例えばその何でしょう、疑問がでたりとか、これは違うんじゃないか、自分が求めているものとは違うような気がするんですけど、っていうような話が出た場合には、聞く耳を持って、それをもう対話していくってことですよね。だから、また私が学習者の立場になるとですね、例えば、私はこれがやりたいんです、って言って、でも先生はいや、君はこっちのがいいって言いだして、話していくうちに、こう、先生がですね、いや、今、君はそういうふうに言ってるけど、本当に考えていることは違うんだよ、そういうふうにもっと深く考えてごらん、って言われても、いや私が思っているのはこういうことなんですからっていう、そういう状況になるんですね。だから、本当は君はこういうふうを考えているんだといっても、でもそれってホントに強制ですよ、なかば、だからそういうような状況にはやっぱり、なってほしくないなっていうのを思っていて、だから、それはちゃんと会話でお互い納得しながら、こう、授業を進めていきたい、教師になった場合でも、学生になった場合でも、そういうふうにするんですね。だから、そこいらへんのことを確認したかったんですけども。

牛窪：それは怖いですよね。あなたはこう思っているんです・・・

武：なんかそういう対話と顔色をうかがうってのが、ちょっと違うと思うんですよ、なんか合わせる必要はないと思うんですよ。なんか学習者主体って本当に学習者に好きなようにやらせてればいいってことではなくって、あくまでもこちらには、なんか、こういうものを目指している、だからこうするっていうところがあ

って。なんか、そこをちゃんと、こうわかって納得してもらって学生が自分で動いていくのが、学習者主体なのかなあと私は思って。で、そのためのプロセスとして、そのぶつかり合いみたいな、何でこんなことやらだよ、みたいなのは大歓迎というか、怖いんですけど、正直その場に立つのは、うまく説明できるのかとか、ちゃんとわかってもらえるのかとか、っていう不安はありますから怖いんですけど、でも、それは必要なプロセスなのかなあと思います。

信森：確かに学生のほうにぶつけていましたので、これは言える雰囲気っていうか、風土ができてるんだなあと感じました。そこまでいうかっていう、(そうそう、(笑))。言われてましたよね。

市嶋：やだーとか泣かれたりとか(笑)

信森：何でそういうことになるわけですか？

武：やだっていうのは。

市嶋：何でしょうね。たぶん今まで勉強してきた、学習観がどうしても捨てきれなくて・・・クラスのコンセプトというものはなんとなく理解しているんだけど、実際自分がその活動に呑み込まれていく中で、それに相容れない何かが生まれてきちゃう時にすぐ拒否反応を起こす・・・やっぱりその時に、何が嫌なのか、じゃ、どうしたら良いのかを話していく必要がある。それでも、全員は納得してくれなくて、最後まで教科書がよかったとか、このクラスのコンセプトは分かるけど、私には合わなかったと言った学生もいて。一方で、コンセプトを理解し始めてくれた学習者っていうのは結構進んでいく。考えも、レポートのほうも進んでいくんだけど、やっぱり、ずっとそこで拒否し続ける学生っていうのはずっとそこで止まり続けていて。で、その差が見えてくると、今度は学習者同士がぶつかってきて、常に教師と学習者間だけでなく、学習者と学習者同士でもぶつかっていく。その後、ずいぶん経ってから、学生と話すと、今ぐらいになって楽しかったとか、良かったとか、大変だったけど、苦勞したけど、というふうに分かってきてくれて。その場にいるときはやっぱりなかなかっていうものもあるかなあ。

西山：だた、教師から言われることをただつまんないなあと思いながらこなしていくというものとは全く違うあり方だなあとと思います。自分たちの問題点としてこう考えて、だから反発の気持ちも起きたりするんだろうし、そういう点では学生を非常に刺激して、やってるんだろうなっていう。

牛窪：過激に(笑) 戦場のような(笑)

寅丸：戦場に地雷が。

牛窪：人間関係で当たり前といえば、当たり前のことですね。

西山：この話題ってすごく日本語教師だからっていうんじゃないかって、本当に普通のそこらへんの日本の小学校でもたぶん先生たちって、こういう話してるのかなあって思うぐらい、なんか普遍的というか。私も自分の身においてもその、会社の中で、あの、みなさんがよりよい授業をしていきたいって同じ気持ちでたぶんより良い編集をしていきたいと思っている。それって、対象は違う、日本語と出版とか違いますけど、なんか普遍的だなあって思って。もしかしたら、なんかそういうビジネスのコミュニケーション能力を上げるためのそういう、研究とかとすごく重なる部分があるのかなと思うんです。これも日本語っていうものを越えて、コミュニケーション能力を育むためにみたいな。その、日本語教師版みたいなそういう感じがすごく今日、しました。

信森：コミュニケーションが行われているんですね、活発に、すごい活発に、言いたくてたまらないという気持ち。それを人間関係を見て、ここでじゃあ、爆発するかっていう。

寅丸：確かに非常に生々しいなっていう、例えば私はまだ何回か、3回ぐらいしか出てないんですけども、非常に今日の授業とかで、今までぼんやりとしていた、学生さんの一人であった人たちが、浮き立ってきたというか。非常に個性のある、性格のある価値観を持ったものとして、こう、出てきたわけなんですね。背景から出てきたという感じになったわけなんですね。で、すごく面白いなっていうふうに思っている。すごく興味深く今日とかも見ていたんですけども、反面、やっぱり、その、怖さっていうのもあって。まあ、それは、私はそこで教えているわけではなくて、単にボランティアで入っているだけなんで、そこに気軽に、ただ、何だろう、こう、そういうふう非常に浮き出てきたそれぞれの個人ですよ。こう、自分の考えの主張をしだすわけですよ、いろいろと。で、自分の例えば今日とかも家庭環境とかは別にその深いこと言わないけども、でも、一応家庭環境で昔こういうようなことだったから、自分は、今度はこういうふうにしたい、みたいなものがあったりして、非常にその、人間的な根幹なことが出てくるんですね。で、そうすると、こう、みんなも同調してきて、っていうか、みんなこの人がそういうことを語るから、まじめに聞かなくちゃいけないみたいな、みんなしてこう、別にそんな結構ゆるい感じなんですけど。でも、ちゃんとまじめに聞いていたりとか、意見言ったりとか、質問したりとかしてるわけなんですね。で、そういうものを見てすごいなあって思ったんですけど、反面すごい怖いなあという感じはしました。で、

たとえばテキストとかをやっている、まあ、代表例としてテキストの使った勉強なんてのをやっていると、それだけやってたら文型集とかが出てたりすると、それはもう、全然彼ら自分とは関係ないものとしてお互いが、その教師も関係ないものとして、学習者にとっても関係ないものとしてこれをして勉強しますっていうことで、人間性とは一切関係ないなってくるんですけども、そういうふうにその学習者の人間性が出てくると、今度は教師のほうが自分の人間性を出していかなくちゃならなくなってしまうたりして。で、そうすると、やっぱり人間対人間の本当のコミュニケーション、生のコミュニケーションの問題になってきてしまうので、本当にそれは、もう、何だろう恐ろしいなあっていうのと、でもそれでもエキサイティングていうような感じがしました。あと、非常に個性が強いものだなあっていう、その構成員と、それからあと、それを、こう、引っ張っていく先生のその組み合わせで、全然変わっちゃうんだらうなって、そういうような金太郎飴ではかたづけられないものっていうか、を感じましたね。

信森：なんか、学習なんで、習得っていうことが学期の終わりに、これだけ変わったっていうことが、あの、プロの教師として必要なと思うけども、その変わることで、構成員とか教師とかによって変わる、それによってその、まあ、伸びも変わってくるわけですよね、それは、なんて言うのかな、個人の学習、学習者個人にかなり責任があるというようなところですかね。その、教師が伸ばせなかったからというようなものではない、っていうことでしょうか。

武：なんか個々で目標、普通のクラスだと漢字何字とかって、目標が一律ですよ。そこが一律じゃなくて、学生が個々に目標が、自分の中にあるから、自分が設定してるってやっているので、で、それをまあ、探りながらやっていくので、何でしょう、学生の責任というか、何というか自分の目標は自分の中にあるにすぎない、と思っているので、その教師の責任ってのは、その学生が目標としているものだったならばそれが満足に（どれだけ上達するっていう）学生の満足いくところまで、とにかく一緒に何か、

信森：満足いくところまではこうやって

武：まだまだとっていれば、私は・・・

市嶋：時間になりましたので、そろそろ終了したいと思います。

一同：ありがとうございました。

「コミュニケーション」という問題を考えるとき、私は2つのことを思い出す。ひとつは、大学時代、専門の語学のクラスで、自分の考えを正確に伝えようとして言葉を駆使したにもかかわらず、教師の解釈で簡単に言い換えられ、言いようのない情けなさを感じたことである。そして、もう一つは、現在3歳の息子がまだ言葉というものを知らなかったとき、不満や怒りなどの激しい感情を周囲にうまく伝えられず、大声で泣きじゃくったり、物を投げたりして、困り果てたことである。

このようなときにいつも私が感じたのは、人が人に自分の思考を正確に伝えようとする根源的な欲求の深さである。それは、日本語教師として教室で学習者と対峙するときにも直面させられ、解決を迫られる問題でもある。日本語教師の仕事は、学習者が自分の思考を思ったとおりに表現できるように支援することであると言っても過言ではないだろう。

では、日本語教師として、学習者の欲求にどのように向かい、支援していけばいいのか。「総合」の授業は、語彙や文型といった言語要素の運用力のみならず、学習者のコミュニケーション能力そのものの育成を志向しているという点で、まさにその間に応える授業であるといえよう。今回の座談会で、「総合」は、コミュニケーション能力を育むための、日本語教師版みたいなもの」といった意見が出たが、これは、筆者が「総合」に参加して抱いた「日本語の授業としての一線を越えている」という感覚を裏付けるものである。

筆者の印象だが、日本語教育の現場では、思考と言語は、学習者があらかじめ母語で思考した内容を学習者のレベルに合った日本語に置き換える、または、日本語の語彙や文型を学習した後に、その運用練習として自分の思考を表現するというふうに、やや分離して扱われることが多いように思う。しかし、「総合」の授業では、学習者の思考が日本語を媒体としてそのまま紡ぎだされることが期待される。日本語は、あくまでも思考を表現する手段であって、目的ではない。目的は自分の思考を伝達することであり、さらに言えば、思考を伝達することによって、意識的にせよ、無意識的にせよ、聞き手の意識を変容させ、それによって自分もまた変容することである。「総合」の目的は、コミュニケーションそのものの目的であるといえよう。

今回の座談会を終えて、鮮明に感じたのは、コミュニケーション能力の育成という観点から見た場合の「総合」の授業の普遍性である。「総合」とは、日本語教育における一つの考え方であって、具体的な指導方法を表すものではない」といった意見や、「学習者中心」とは異なる「学習者主体」といった考え方についての意見なども、このような「総合」の本質を表す意義深い話だったと思う。

そして、何より印象的だったのは、担当者それぞれが、自分なりの「総合」について試行錯誤しながら、教室環境づくりを行い、教室活動を実践していることだった。試行錯誤の末に作り出された教室環境を学習者に提供し、そこで行なわれた学習者とのやりとりを踏まえて、さらによりよい環境づくりを実践していくという担当者の姿勢は、コミュニケーションを実現させることによって、コミュニケーション主体相互の意識を変容させていくという「総合」の根本的な考え方を体現しているように感じられた。

「総合」の授業における教師、学習者、教室環境のあり方は、試行錯誤の過程で変容していくものだけに、個性が強く、確固としたものとして捉えにくいように思われる。しかし、座談会では、思考し、変容していく過程、または、そこに現れる諸要素の関係性そのものに重要な意味があるのだということを確認させられた。日本語教師としては、解答のない大きな課題を背負わされたようで、荷が重い、習慣化、固定化されがちな日々の授業について、深く考える機会を与えてくださった報告書・座談会関係者の方々に厚く御礼を申し上げたい。

座談会の感想 信森あづさ

座談会の冒頭で、「ざっくばらんに、疑問に思っていることや気になることを率直に、執筆者に語ることが目的です」と言われ、文字通り、言いたい放題、聞きたい放題に、さまざまな話をさせていただいた。そのことを通して私が「総合活動型日本語教育」について考えたことをまとめる。

1. 「方法」ではなく「考え方」

まず、「総合活動型日本語教育」（以下、「総合活動型」とする。）とは、「活動の方法」というより、「考え方、目指す方向性、思想」であるということを知った。「総合活動『型』」という名前なので、何か一定の「型」、モデルやパターンのようなものであるという印象があった。しかし、座談会の中で「型があってそれに合う学習者がいるというのではなく、学習者とその現場に合わせていろいろ形を変えてできるものであり、固定されたものではない」ということが何度も説明されていた。では、「総合活動型」における「考え方」の中心になるものは何かという問に対する答は、「学生が考えることを中心において、そこに言葉をのせていく、かぶせていくこと」ということであった。

2. 到達目標

「学生が考えることを中心におく」ことから、「総合活動型」のクラスで設定される「到達目標」は一律ではなく、「学生が個々に設定し、自分の中に持っているもの」と考える。このように、学習者それぞれが自分の目標を設定するタイプのクラスとしては、「漢字」のように、背景やレベルの差が大きく、学習スピードにも差があり、到達目標もばらばらな場合に、個人作業を基本として、教師と学習者が「コントラクト（契約書）」を結んで個々の目標を設定するというタイプのものが多かった。しかし、「総合活動型」のように、クラス内で議論を中心行う場合にも、それぞれが異なる目標を持つと考えるということから、「目標」について改めて考える必要を感じた。

3. 教師の役割

「総合活動型」のクラスにおける教師の役割は、「学生が目標としているものに、学生が満足いくところまで一緒に付き合う」ということであった。どのように付き合うのかを、座談会でもっと聞けばよかったと今は思うが、一例として挙げられていたのは、「議論が意味のある形になるように、『ああでもない、こうでもない、終わり。』とならないように調整を考える」というものであった。「埒の明かない議論にさせないように、意味のある議論になるように」というのは、討論番組の司会者のような役割をイメージするが、これはセンスや技術を要する難しい役割であるように思う。

4. 教科書

「総合活動型」の授業の代名詞のように言われることの一つに「教科書を使わない授業」というのがある。この点に関して座談会の中では、「教科書を使う授業と総合活動型の授業を対照的に考えるのではなく、総合活動型の授業の中でも、教科書やそれに類する物を使うこともある。」という説明があった。教科書があるクラスでも総合活動型的な考え方で授業ができるというのは、「学生が表現したいことのためにテキストがあり、テキストにあるものはどんどん使おう」という考え方であり、要は「何をどういう風に使うか、どういう目的で使うか」というところに「学生が考えることを中心におく」という「総合活動型」の考え方が反映されるものであるということだった。確かに、教科書を使って授業をする場合、「(教科書にあるから)この表現を使ってみましょう」としてしまいが、よく言われる「教科書を教えるのではなく、教科書で教えなさい」という言葉を改めて思い出した。

5. 誤用訂正

誤用訂正も、「教科書」と同様、「総合活動型」の特徴としてよく挙げられる項目であり、私の周りにいる人には「総合活動型」=「誤用訂正をしない」と考えている人が多いように感じる。しかし、座談会で「考えていることを相手に分かりやすく言うために、絶対直さなければいけないというのも、絶対直してはいけないというのも違う。」というふうに考えているとのことだった。過去の実践例から、「もっと誤用訂正をしてほしかった」という声も複数あったようなので、そういう学習者に対する対応と、誤用訂正を特に希望しない学生に対する対応を変えることが許されるのも、学生が考えることを中心におき、個々人が自分の目標のもとに学習を進める「総合活動型」の授業では可能なのではないかと感じた。

6. おわりに

座談会を通して、「総合活動型日本語教育」というのは特定のテクニックやメソッドを指すものではなく、「こういう風にやるのが総合活動型のやり方」というものではないということが分かった。決まった方法がないため、どうすればいいのかわからず迷う、という反面、「この学習者には向かない」という制約もない。したがって、どのような現場でも活かすことができるものであり、私の授業でも「学生が考えることを中心において、そこに言葉をのせていく」ということを考えていきたいと思う。